

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 一色大悟

経量部という学派に属し、伝統部派仏教と大乘仏教の双方の思想に精通した学匠ヴァスバンドゥ（世親、5世紀）が、当時の最有力部派であった説一切有部（有部）の諸教義を『俱舎論』という大著において体系化して以来、東アジアやチベットなど北伝仏教の系譜における伝統仏教の教義理解は、もっぱら『俱舎論』に依拠してなされてきた。経量部の理解が浸透した『俱舎論』は、だが有部の重要な思想理解をときに大きく損ねてしまう。『俱舎論』による有部教義体系化の意義を生かしつつ、そこに内在する歪みを適切に修正することができるなら、有部の思想は理想的なかたちで復元されるだろう。本論文は、「法」dharma という究極的存在の要素が、過去、現在、未来の三世にわたって存在するという、有部の説く存在論の基盤となる「三世実有説」の主張の内実を、世親と同時代に生きたカシミール有部の学匠サンガバドラ（衆賢、5世紀）が著した、『俱舎論』批判の浩瀚な著作である『順正理論』の解説を通して再構成し、この課題に本格的に応えた画期的研究である。

論文は、研究史を整理した序論、存在を認識する過程について存在の二種の定義と覚知を鍵概念として分析した第1章、法が存在する根拠についてさとりを対象である涅槃の実在性やブッダのことばの真理性に基礎づけられることを論証した第2章、および結論からなる。本論文の特筆すべき貢献は、『俱舎論』と『順正理論』という、それぞれ漢訳にして30巻、80巻に及ぶ二つのMagnum Opusを、存在論、認識論、救済論という主題において徹底して照合し、認識論的存在論という名で総括しうる衆賢の思想の詳細を、はじめて明らかにした点にある。

「三世実有」に関する記述は、『順正理論』全体にわたって顕在的あるいは潜在的なかたちで散説されており、この主題を考察するためには、それらの記述を網羅的に回収し、個々の文脈の相違を弁別しつつ分析しなければならない。加えて、漢訳でのみ残る『順正理論』を、サンスクリット語の『俱舎論』の議論と比較するために、高度な文献学的操作をもってサンスクリット語の地平に転換する必要がある。本論文はこれらの困難な課題をみごとに解決し、『順正理論』の議論全体から『俱舎論』と比較可能なかたちでその存在論を構成することに成功した。説一切有部の説く存在理解について、『俱舎論』の影響を離れて『順正理論』による理解の全体像を示しえたことは、きわめて大きな成果であり、今後の学界の研究の方向に相当な影響を与えるにちがいない。本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断する。